

東海大学建築会卒業設計賞 2013

Kenchikukai Design Award

審査評



卒業設計はほんとうに難しい。言うまでもなく、自ら課題を設定しそして自ら解いてみせなければならないからです。それは与えられた課題だけを解いていけばよいという環境で育った我々にとっては途方もない作業のようにも思えます。しかし、私はここ10年ちかく、神奈川県内、あるいは全国で選抜された卒業設計コンクールの運営にあたり、その経験から一つの確信を持ちました。どのような課題設定であろうと、優秀な作品を生み出すことは可能であり、そのチャンスは皆平等であるということです。

つまり、問題はその課題に取り組む姿勢であり、その結果評価されたとすれば、それは作者の努力の賜であるということです。

最優秀賞の渡邊健太案は、地域と都市環境を結び付けるためのプログラムを小学校と公園を用いて解こうとした案でした。二重螺旋構造で整理された動線は途中から絡み合い、様々に交錯する視線の抜けをつくりだすことで、地域住民と生徒、都市と小学校とをつなぐ新しい建築としての様相がとても魅力的に思えました。しかし、残念なことに肝心の動線内に格納されたプログラムの精度、模型の表現ともに十分とは言えず、あきらかにタイムオーバーと思われました。それはスタートの遅さが原因と思われ、努力の程が疑われましたが、構成されつつある空間表現の魅力から金賞を受賞いたしました。

優秀賞の大越菜央案は、たった一人の、しかも二人称である老人のための家の計画案でした。その極めて限定的な設定条件から彼女が訴えるべきことは、ふたつあったはずですが、ひとつは計画論的ユニバーサルデザインに対する批評性、もうひとつは、都市のノイズと日照問題に対する皆が心地よいと思えるかもしれない新たな空間の提案。極めて緻密なサーベイを重ねて導き出された造形は、既存建築との不整合を吹き飛ばす勢いで構築され、その力業に一瞬たじろぐ思いがしましたが、私はその特殊性から一般性への接続にこそ、可能性を信じたいと思いました。

去る、2013.1.29 に東海大学建築会主催による

東海大学卒業設計賞 2013 が湘南キャンパス 17 号館 2 階ネクサスホールにて、参加総数 31 作品により開催されました。

審査員の建築家の方々に、受賞者及び参加者への労いとエールを込めた貴重なお言葉を頂戴しました。

ご一読ください。

建築会会長 富永哲史 / 富永哲史建築設計室

もうひとつの優秀賞案の板部奈津希案は都市の公園内に、街と人に開かれた新しい公共建築を建築することで、旧市街と新市街とを結ぶ提案でした。点在するように浮いた屋根の造形は透明感に満ち、計画された池や樹木と一体となり散策路のような建築の魅力が表現されていました。しかし私はその魅力的な屋根の下に広がる建築空間が極めて均一なものに思え、その表現がかえって計画性の希薄さを露呈する結果になっていることに危うさを感じていました。一体誰のための建築なのか。誰が君の提案を歓迎してくれるのか。美しさだけでは建築は成立しません。次はぜひ、そのハードルをクリアーして下さい。

最後まで賞を争った石川雄斗案は、立体格子構造のリアルさとその緻密さに目を奪われました。私にとって残念であったことは無表情なガラスのファサードです。内部において、格子とディスプレイの整合性まで考え抜いた案ではありましたが、肝心の街に対する表情がとても冷たく都会的であったことです。それはつまり、工芸という手のぬくもりとスケール感が、都市にどのように接続してゆくのか、という提案でもあり得たわけです。今回、受賞は逃しましたが必ず将来の糧になるだろうと期待させる案でした。

あとひとつ、気になる作品が高橋瑛大案です。それは人体スケールから導き出された最小限空間の提案で、原寸モックアップを作成していることはこの案にとって非常に好ましく思えました。

なぜならば、現代はコンピューター社会であり、身体性という重大な感覚を忘れがちだからです。スケール感や質量、冷たさや痛さといった感覚の世界を皆さん忘れてはいませんか？

屋根は透明なプラ棒で浮いたりはしません。目線の抜けと衝突をつくったからと言って、そこにコミュニケーションが発生するほど、建築は単純ではありません。もっと生々しく、そして厳しいものです。そして間違いなく建築とはそのたった一人の身体性から出発するべきものです。建築とは誰のものなのか。誰がそれを歓迎するのか。繰り返し問うてほしいと思います。

公共建築であれ、住宅であれ、そこにたった一人の人間すら思い描けなければ、それは建築になり得ないということです。合板の箱とその内部空間を見たとき、幼年期に感じた空間の原点を見た思いがしたのは決して私だけではないはずです。

審査員長 岸本和彦 / acaa

Sponsored By Tokai Architecture Organization
www.tokai-arch.org

